

「青年海外協力隊」

杉原 千鶴

SUGIHARA Chizuru

南太平洋に花咲く南国の楽園 スコールが道路整備の障害に

美しい海にお祭り好きの人たち。果物や野菜が豊富な常夏の島。バヌアツは、日本人が考える南国の楽園のイメージに近い国だ。「仕事で田舎に行くと、現場近くの村の人たちがご飯や庭になっていたり果物を分けてくれるので、お昼の食事にはあまり困りません。私が一人暮らしをしていると知って、さびし

JICA Volunteer Story

PROFILE

1984年、広島県出身。大学で農業土木を学んだ後、建設会社に就職。2014年7月から青年海外協力隊員(土木)としてバヌアツで活動中。



お祭り好きでフレンドリーなバヌアツの人たち

「南国の雨に負けず、生活を支える道作り」

お祭り好きで親切な人たちが住む、南の島バヌアツ。観光と農業が盛んな国だが、日常生活を支える道路が整っていない地域もある。杉原千鶴さんにとって、この国で作る道は、自分と世界をつなぐ道にもなっている。



くないように子どもをお泊りさせてあげようかと言われたこともあります。ちよつとやり過ぎではと思ってしまうくらいに面倒見がいい人たちです」と、杉原千鶴さんは語る。

杉原さんが土木隊員として派遣されたのは、バヌアツ最大の島エスピリトゥ・サント島。83の島々からなるバヌアツの北西部に位置し、同国最高峰のタプウエマサナ山(標高1878m)を擁する産業と観光の中心地だ。島の道路の多くは、アスファルトではなく、砂利(グラベル)で舗装されている。こうした道路や水道の整備が、杉原さんの主な仕事だ。

グラベル舗装でも、重機を使ってきちんと舗装すれば、車もスムーズに走ることができる。そのために必要な重機やオペレーターはそろっているのですが、その点で困ることはなかった、と杉原さんは言う。作業の大きな障害は、モノではなく、天候だ。

「きちんと舗装しても、スコールが降るとすぐ水たまりができて、道がでこぼこになってしまいます。それを再び整備し直すので、まるでいたちごっこです」。季節によっては強いスコールが続くこともあり、そんなときは作業をやめて、機械のメンテナンスなどをして何日も好天を待つしかない。

町から離れた地域に住む人たちの主な仕事は農業。収穫物を運搬するためには車が不可欠で、道路の整備や延伸は、その地域に住む人々の生活に直結する。アスファルトで舗装できればその後のメンテナンスも楽になるのだが、そのための機械は首都ポートビラのあるエファテ島に一台あるだけで、サント島までは回ってこない。今ある機材と予算を使っていか道路を整備していくか。年間計画と、気候の変化や急な予定の変更の間で、杉原さんの試行錯誤が続く。



a.穴が開いてしまった道路の整備。せっかく整備しても、大雨などで舗装が壊れ、再整備が必要になることが多い
b.現地スタッフと一緒に作業。自分ができそうなことを見つけて積極的に取り組んでいる
c.現地には一通りの道具はそろっている
d.職場の仲間たちと。離れた地域では泊まり込んで道路整備などを行う、熱心な職員が多い

英語力と積極性で自分の世界を広げ「これからの日本」を考える

青年海外協力隊への参加を決める前、杉原さんは海外で働くことを目指していたわけではなかった。農業土木に興味を持ち、卒業後は建設会社に入社。土木の専門家として経験を重ねているときに、アフガニスタンで医療ボランティア団体を運営する中村哲医師の本を読んだのが、世界に目を向けたきっかけだ。

土木工事は、一度プロジェクトが始まると2年、3年と続き、その間は離れることが難しい。杉原さんは30歳になる前にプロジェクトが一段落するタイミングで、青年海外協力隊への応募に踏み切った。

それまで、旅行でしか海外に出たことのなかった杉原さんにとって、開発途上国に長期滞在して働くことは、広い視野で世界と日本を考え直す機会になった。「バヌアツにはさまざまな国からボランティアが集まっていて、英語で意見交換をしています。十分な支援のためには、専門技術とそれを説明できる英語力、周囲と話し合っ互いの理解を深める積極的な姿勢が大切だと実感しました」と、驚きを語る。

オーストラリアやニューカレドニアの近くに位置し、かつては英仏に共同統治されていた歴史から、バヌアツの人々は英語かフランス語が話せる。また、杉原さんが現地のビスラマ語で話せば、職場の誰もががしかり耳を傾けてくれるという。現地の人たちも、道路の補修をしていると感謝の言葉を掛けてくれたり、働き過ぎないでといたわってくれたりする。「日本の中で完結していた自分の世界が、本当に世界とつながり、今後の日本の方について考えるようになりました」と杉原さん。これからも、自分なりのやり方で世界に関わっていくつもりだ。